

ぼくたちの

文／荒尾美知子 絵／ゴトウノリユキ

おとくに会う、作戦



はるニイニイは

学校がっこうで、おとうの顔かおを

知らないことを

からかわれたという。

「よし、わかった。

じゃあ、はるの

『おとうに会あう』作戦さくせんをたてよう」

よしニイニイがそう言いったとき、

木きの下したから妹いもうとのふみの声こゑがした。

「しんニイニイ、おばあがさがしとるよ」

「えっ？ うわっ、たいへんだ！」

「しん、続つづきはあしただ。

秘密基地ひみつきちその二にに集しゅう合ごうだぞ」

「オツケー！」

ぼくはおおいそぎで、木きからとびおりた。



そのころ、この村むらの半はん分ぶん以上いじょうが

アメリカの飛行場ひこうじょうや基地きちのたてものや、

住すむところになっていた。

だから村むらの人ひとたちは、残のこったところところに家いえをたて、

あいてる土地とちはすべて畑はたけにした。

さとうきび畑はたけだけじゃない。自分じぶんたちが食たべる

野菜やさいを作るつくるためにもだ。





「ただいま」
 庭一面に広がる畑で、
 おじいとおばあが今夜のおかずにする、
 野菜をとっていた。
 「しんいち、早く火をおこしとくれ」
 ふみは、おばあと野菜を洗う。
 いつもの夕方のふうけいだ。



サトウキビ畑からおとうと
 おかあも帰ってきた。

テレビでは、オリンピックの
 ニュースばかりながれている。

「すごいなあ、東京
 行ってみたいさ」

ぼくはテレビにうつる
 東京のようすを

うっとりとながめていた。
 ぼくたちは、日本にあこがれた。

日本に、日本人にもどりたかった。
 日本にもどれば、沖縄にも

どんだんビルがたつし、
 堂々と日の丸を

ふるることができるし、
 アメリカがみんな
 沖縄からいなくなる、

次の日、ぼくはサトウキビ畑での
草とりの手伝いをすませたあと、
秘密基地その二に向かった。

ぼくはニイニイたちのすがたを

見たとたん、笑いころげてしまった。

三人とも、赤ん坊をおぶっている。

ぼくとよしニイニイは弟を。

はるニイニイは、となりの家の女の子を。

「ははは……。子守りは、ぼくたちの

だいじな仕事のひとつさ」

さっそく赤ん坊のためのねどこを

作り、そっとねかせた。





カヨちゃんち とうふ屋さん

文 / 荻原美知子 絵 / のちがよしはる



とうふ作りは、前の日に大豆を水につけておくところから始まる。水をふくんでふくらんだ大豆を、石うすでつぶして、どろどろにする。それをあたためて、しばって、おからと豆乳に分けるんだ。豆乳にがりを入れてよくまぜる。そして、あたたかいうちに型に入れる。今父ちゃんがやっているのが、それだ。このあと、型の上に重石をのせて水分をぬく。最初は石ひとつ。だんだん数をふやしていく。こうして、とうふができあがる。できあがったとうふは、水が入った大きなおけの中で冷やす。とうふがぶかぶかうかんでいて、まるでおふろに入ってるみたい。



「ほら、これ。たのんだぞ！」

大きな缶の中には、

とうふが五丁入っていた。

「重たいから気をつけてけ」

これからこのとうふを、

ちょっと遠くのやお屋さんまで、

届けに行く。これが、きょうから

始まる私の仕事。

缶を自転車の荷台にくくりつけ、

いよいよ出発だ。

道路はつるつるにこおってる。

でも私はおてんばだから、

どんな道だってへっちゃら！



ようやく顔を出してきた
お日さまに向かっ、私は
ぐんぐんとペダルをこいだ。
やお屋さんまで、あと少し。